

SLIDE1

ノートブック… Evernote

作成日: 2020/05/07 21:29

更新日: 2020/05/07 23:12

作成者: ikeda keiko

SLIDE1

ここから15分ほどお時間をいただいて、日本語（と英語のダイジェストをチャットで表示）で、コロナ状況下、そしてコロナ収束後の国際教育のあり方において今までよりも活用が高まるのではと考えられる、遠隔による多国間連携型の共修実践、Virtual ExchangeやCOILについて解説したいと思います。

SLIDE2

まずは、こういった実践のタイポロジー、つまりどういった実践モデルがあるのかを見ていきます。

SLIDE 3

まず、COILです。COILは、アクティブラーニング（能動的学習）を促すグループ活動を、collaborationタスクとして課す教育実践

です。この実践では、海外と国内の大学の科目間の連携が前提です。異なる国・地域間で遠隔でつながるため、かならずICTを介することになります。海外の大学との学年歴の違いなどを考慮し、例えば1セメスターの内、海外のクラスのオーバーラップがある4－6週間の間、このような活動を科目に取り込むことでCOIL科目、が実現します。関西大学では、大学の国際化戦略の一環として位置づけ、2014年から導入してきました。

SLIDE4

COILの特徴は、このコラボレーション協働学習を行うことです。単なる労働分割やグループワーク作業ではなく、一つの目標・課題解決・達成を目的としてチームで活動をします。このコラボレーションラーニングを、海外の大学のメンバーを含むバーチャル・チームで行います。

SLIDE 5

COILは、マッチングする科目のペアリングによって、学際的・多分野間の融合型学習が可能です。学際的と言っても、そのパターンは様々です。

このスライドにあるように、異なる分野のアプローチを応用して問題解決を行ってみる場合はcross-disiplinary, それぞれが専門分野のアプローチによる分析を持ち寄る場合はmultidisciplinary, 多分野のアプローチの見解を融合した解決法を見出す場合はinterdisciplinary,そしてその融合が新しい分野の創造につながる場合はtransdisciplinaryと、様々です。

- Intradisciplinary**: working within a single discipline.
- Crossdisciplinary**: viewing one discipline from the perspective of another.
- Multidisciplinary**: people from different disciplines working together, each drawing on their disciplinary knowledge.
- Interdisciplinary**: integrating knowledge and methods from different disciplines, using a real synthesis of approaches.
- Transdisciplinary**: creating a unity of intellectual frameworks beyond the disciplinary perspectives.

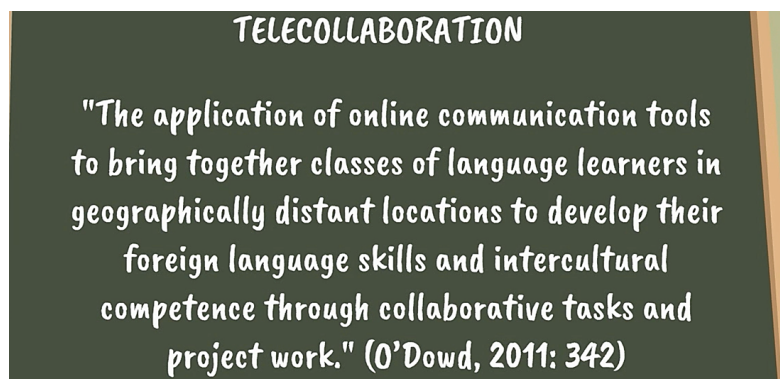
SLIDE 6

COILの事例の多くは、同一科目間で起こるものもありますが、multidisciplinary もしくは interdisciplinaryなペアリングとなります。これは海外と国内の科目で100%同じものが展開することは少なく、また「同一」のフィールドだとしてもその中での細分化によって、担当科目講師間では「interdisciplinary」だとみていることも多いからです。問題・課題設置型共修で得られる学びを深化させる上で、学際的な状況を導くことができるのは、非常に効果的だと思います。

SLIDE 7

外国語教育における多国間連携型学習は、Telecollaborationと呼ばれます。このスライドにあるように、異なる言語を話す者同士が共修することにより、

言語知識だけではなく文化面の学び、そして多文化理解の能力を養成するのがこの実践です。



SLIDE 8

VEは、COILやTelecollaborationなどの実践よりもより緩やかな定義です。同期型・非同期型のICTツールを活用し、参加者らに表面的なつながりにとどまらない

共修を行う活動なので、大学間の関係構築に基づいた「共修」という限定はありません。

Virtual exchange should use a mix of synchronous (live, e.g. Zoom, Google Hangouts) and asynchronous (time-delayed, e.g. recorded, social media posts, or email) technologies that allow participants to interact and exchange beyond surface level connections.

SLIDE 9

VEの活動の様子は、このようなものです。

例えば、複数の拠点間をウェブ会議ツールでつなぎ、活動を行うもの。

SLIDE10

1つの拠点から提供される授業を、ICTでつながった複数の教室の参加学生らが共に学び、ディスカッションを行うといったものもあります。

SLIDE11

COILも、VEも、実践を応用できる科目やテーマの分野の限定はありません。参加する学生のそれぞれの専門分野が異なっても、むしろその方がより学際的で学びの多い活動となります。

SLIDE12

さて、COILについて、よく聞かれる質問群がありまして、これをここでご紹介したいと思います。これらの質問への回答が、より皆さんの理解を深めることができるのではないかと考えています。

SLIDE13-15

SLIDE 16

このCOILの実践ですが、通常であれば6週間～8週間などのタイムスパンでオンラインセッションや非同期でも交流活動ができるツールを活用してコラボレーション学習を進めますが、現在のコロナの影響を受けて、この春学期については、例えば関西大学では、すこし期間を短縮し、それでも、全面遠隔教育となった状況をむしろ好機と捉えて、海外との連携を行っています。皆さんの大学でも遠隔教育がデフォルト化したと思います。これにより、例えばこういったオンラインツールの活用や、LMS、情報共有や連絡の手法などテクノロジーを活用する機会は確実に増えているはずです。ここまでくれば、VEやCOILへのアクセスはかなり近づいています。ぜひ導入を考える機会として考えてもらいたいと思います。

SLIDE17

ではここですこし「なぜVEやCOILをするべきなのか」を考えてみましょう。

SLIDE18

まず、コロナ以前では、これをどう理解していたか。

SLIDE19

これまでは、こういったスキルの醸成に、きわめて有効かつALL in ONEであるので、取り込むべきだと、IIGEでも理解し主張してきました。

・異文化対応能力

・英語によるコミュニケーション能力

・集団による課題解決能力

もちろん、この理由は今でも消滅しているわけではありません。

SLIDE20

では、コロナの大打撃を受けている国際教育の現状においては、どうなのか。
以前は、COILは、それぞれの大学・機関にとって適性があり、価値がみとめられれば導入すべき、1つのオプションだと
言っていました。今、留学先から送還される学生や、留学の機会を失った学生達に提供できる
国際教育という観点から、
この実践は導入不可欠なものとなるかもしれません。

SLIDE21

QSの最近の調査結果によると、それぞれの地域において、留学をあきらめた、もしくは1年以上先送りしたという層が
かなりのパーセンテージでいることがわかっています。

SLIDE22

また、日本同様、各国において、多くの機関で2020年度中オンラインで授業を受けています。
この環境にあるため、関西大学でも今実際に体験しているのが、同期・非同期のオンラインの
活動に参加すること、が、通常の遠隔授業の
活動に入り込むことに以前にまして抵抗なくカリキュラムに融合できるということです。

SLIDE 23

ポストコロナ禍も、視野に入れて考えるべきでしょう。
コロナがもたらした学習のあり方の変化、そして社会に半ば強制的にもたらされつつあるテレ
ワークや働き方の変革は、ここにあるような
21世紀スキルは、今までよりもさらに個々の学生が卒業し社会人になるまでに、基礎的なエン
プロイアビリティスキルとして修得すべきです。

SLIDE24

そして、バーチャルチームで働くことは、必須化します。
バーチャルであれば、国境は意味をなしません。COILやVEがもたらす環境は、まさにnew
normalとしてこれから広がるワークスペース
となるのではないのでしょうか。

SLIDE25

コロナ禍の中で、こういった、新たなVE・COIL型の教育の取りこみは、国外でいち早く始まろう
としています。

SLIDE26

QSの調査では、世界の学生達の間で、オンラインカリキュラムをとおして海外の学位をとる、
つまり国内から移動をしない形での国際教育への関心は、
まだまだ未成長ではありますが、それでも見える化してきていることがわかります。

SLIDE27

こういった動きの波に乗るように、欧米を中心として、VE型のsummer course, 単位付与がな
される有償プログラムが軒並みラインアップするよう
になりました。国際教育のインバウンドプログラムにおける収入源が激減する中の対策として
講じることが多いようです。

SLIDE28

また、学内の学生向けとしても、留学の機会を失った学生向けに、単位付与ができる留学に代替する学習機会の提供を行う上でVEを取り込む海外大学から、本学もその交流相手として声がかかっています。こういった動きは国内においても今後多くでてくるでしょう。

SLIDE29

ここで重要となるのは、国際教育プログラムとしての質の保証です。VEやCOILの最も重要な最終活動は、省察です。学生一人一人が活動のプロセス振り返り、そこで自身を変容させる学び、high impact learningを形付けます。共修の設計に加えて、この省察を学習過程の一部として確保することも大事になってきます。

SLIDE30

VEやCOILが当たり前になると、ここにあるようなblended型の国際教育が実現します。

SLIDE31

欧州では積極的に取り込まれているBlended Mobilityですが、海外留学の機会と、VE・COILといったVirtual Learningの機会をうまく混合・融合し、ニーズ別に最も最適な

国際教育プログラムを作り上げるものです。

SLIDE32

Virtual Exchange/ COIL/ Virtual Mobility と留学（モビリティ）の多様なコンビネーションが想定できます。参加期間も、VE期間、留学期間ともにショートからロングまで多様なアレンジが可能ですし、1つの大学にとどまらず複数の大学/キャンパスでの連携による実施(collaborative arrangement)もできます。モビリティの稼働率の幅は、コロナ直後、半年後、1年後と、様々に可能性は変化します。このふり幅に柔軟に対応したblended mobilityを創り上げることが、今できることなのではないでしょうか。

SLIDE33

ここで、いったん私からの解説をストップし、本学IIGEで今コロナ禍の中動いているCOIL実践の共有報告をしたいと思います。3名の本学の講師が進めているCOIL事例を、ここからは英語（と、日本語のダイジェストメモをチャットにて）で紹介をしていきます。